

トマス・ウェイドの北京語表記「-o/-ê」について

中村雅之

1. 問題点

「歌」「各」「熱」「車」など、現代のピンインでは「-e」で表記される韻母[ɤ]を、19世紀後半のウェイド(Thomas Wade)は「-o」または「-ê」で記しており、しかも著作によってその分布が少しずつ異なっている。本稿はその事実を確認しつつ、それらの表記がどのような意図のもとに選択されたかを探ろうとするものである。

2. 分布

以下の表はウェイドの『尋津録』(1859)、『語言自邇集』(1867,1886²)本文および同書「音節表」における状況を簡単に比較したものである。(『語言自邇集』1867年本は未見。いま同内容と思われる日本翻刻本『清語階梯語言自邇集』によれば、1886年第2版と表記上の差異はほとんどない。なお、資料はいずれも不二出版『中国語教本類集成』による。)

	例字	『尋津録』	『語言自邇集』本文	「音節表」
果摂牙喉音	個/可	-o	-o	-o, -ê
旧入声牙喉音	革/客	-o	-o	-o, -ê
仮摂舌歯音	車/這	-ê	-ê	-ê
旧入声舌歯音	得/舌	-ê	-ê	-ê
日母「熱」	熱	jo	jê	jê

3. 『語言自邇集』の本文と「音節表」

『語言自邇集』については、本文と「音節表」とで状況がやや異なっている。これは本文と「音節表」とが同時期に作られたものでないことを示している。そして『尋津録』の状況と比較すれば、『語言自邇集』本文よりも遅い段階で「音節表」が作られたことは明らかである。「個」「各」は一貫して「ko」と綴られていたが、最終段階の「音節表」では「kê」を加えて「ko, kê」となった。つまり、「音節表」が作られた段階では、韻母[ɤ]を全て「-ê」と表記してもよいと判断されていた可能性が高い。そこに「-o」も併記されているのは、すでに本文に用いていた表記「-o」との整合性を崩さないためであろう。それではなぜ、『尋津録』および『語言自邇集』本文では「-o」が用いられたのか。何らかの音声を反映しているのか、あるいは単なる表記上の問題なのか。

4. 「-o」と「-ê」の区別

『尋津録』と『語言自邇集』本文の表記はほとんど変わらない。牙喉音声母を持つ時に

は「-o」と表記され、舌歯音声母の場合には「-ê」となる。唯一の相違点は、日母の「熱」が『尋津録』で「jo」、『語言自邇集』で「jê」となることである。

一般論として言えば、音韻論的に同一の韻母と解釈されるものが、結合する声母の調音点によって音声的な相違をもたらすことは十分にあり得る。したがって、例えば19世紀の北京語における音素 /ə/ が、牙喉音声母と結合する時には [kə ~ kə] のような円唇母音として発音され、舌歯音声母と結合する時には [tʂ] のような非円唇母音として発音されていたと仮定することは、机上の論としては成り立つ。

しかし、他の資料を考慮に入れるならば、そのような仮定が成立する可能性はほとんどない。北方音を表したハングル資料(明代~清代)と満洲文字資料(清代)がともに「個」「可」などを非円唇母音で表記していることに加えて、ウェイドと同時期のエドキンス(Joseph Edkins)が北方では「個」「可」などを非円唇母音で発音する旨を明言しているのである。

それではウェイドはなぜ非円唇母音 [ʃ] に対して「-o」という表記を用いたのか。それについてはウェイド以前の西欧人の研究が大いに影響していると考えられる。

5. ウェイド以前の「-o」

高田時雄「清代官話の資料について」(『東方學會創立五十周年記念東方學論集』1997)が記すように、ウェイド以前に中国語の研究に従事した西欧人のほとんどは北京語よりも南京官話を重視した。そのような環境の中でウェイド自身も初めはおそらく南京官話を学習したはずである。南京官話では「個」「可」などの韻母を [-o] と発音しており、したがってローマ字でも伝統的に「-o」と表記された。一方、「車」「這」などの韻母は「-e」であった。このような表記(および発音)が、北京語を表記しようとしたウェイドにも影響を与えた可能性は十分に考えられる。つまり、実際には区別のない北京語の韻母に対して、牙喉音声母の後で「-o」、舌歯音声母の後で「-e」という、南京官話を反映した伝統的な表記をウェイドが受け継いだという可能性である。

とはいえ、この仮説は、ウェイドの表記が北京語の音声から乖離して伝統表記を用いたということを必ずしも意味しない。なぜなら、ウェイド自身は「-o」と「-ê」が、それを書き分けるに足る音声的相違を伴っていると信じていたフシがあるからである。

6. ウェイドにとっての「-o」

ウェイド以前のローマ字資料における南京官話の「-o」と、ウェイドにおける「-o」とは分布が異なっている。伝統的な表記では「-o」は「個」「可」など果摂一等に対する表記であるが、ウェイドにおいては果摂のみならず、「革」「客」など入声由来の韻母にも用いられる。「革」「客」は伝統的には「-e」(エドキンスは「-eh」)と記され、果摂とは明瞭な区別があった。ウェイドがそれに従わなかったのは、自ら北京語の音声を観察した

結果として、「個」「可」と「革」「客」の韻母を区別する必要なしと判断したからに外ならない。

それでは一体、ウェイドは牙喉音の「個」「可」「革」「客」(いずれも「-o」)と、舌歯音の「車」「這」「得」「舌」(いずれも「-ê」)をどのような根拠によって区別したのであろうか。以下は私の推測である。

ウェイドが接した北京音では、「個」「可」「革」「客」などは後舌母音[-ɤ]で発音され、「車」「這」「得」「舌」などはそれよりはやや中舌的な[-ə]に近い響きを持った母音で発音された。北京語のネイティブにとってはほとんど意味のないそのわずかな差異を、ウェイドは有意味なものとして判断した。なぜなら彼は北京語以前にすでに南京官話を学んでおり、その体系が頭の中に構築されていたため、無意識的に南京官話の体系に近づけながら北京語を捉えたからである。そのため、北京人が発する母音[-ɤ]がウェイドの頭の中で自然に[-o]のような円唇母音に変換されてしまったのだと思われる。

ウェイド自身は、『尋津録』part 1, 83頁に母音「o」の説明として、「something between the vowel sound in *awe*, *paw*, and that in *roll*, *toll*。」と述べている。これによればやはり円唇母音を思い描いていると考えざるをえない。一方、同82頁の「ê」の説明では、その母音を英語の*earth* や*perch* の母音としているから明らかに非円唇母音である。なお、これらの音声の説明は『語言自邇集』にも引き継がれている。

7. 「熱」の表記

「熱」については2節に掲げた表のような状況にあるが、細かく見ると、ウェイドの判断はやや揺れている。『尋津録』の本文および音節表では「jo」であるが、音節表の次に掲げられた音節一覧表(synoptical table of the syllabary)では「熱」は「jo」と「jê」の双方の位置に載っている。また、『語言自邇集』では基本的には「jê」であるが、第2版の音節表には「熱」に対して「jê」と「jo」の両音が充ててある。

いずれにせよ、ウェイドが日母の「熱」を「車」「這」などとは韻母がやや異なると認識していたことは間違いなさそうである。有声のそり舌音が後続の母音に、「車」などの母音よりは少し広めで後ろよりの響きを持たせた可能性が皆無とは言えない。

8. 『語言自邇集』音節表の「ko, kê」

ウェイドは北京語の非円唇後舌母音[-ɤ]をいかに表記するかということに苦心したのであるが、それはこの母音が南京官話に存在しなかったことによるであろう。中舌の[-ə]は「車」「這」などに存在したが、後舌の[-ɤ]は南京官話には存在しなかった。一方、北京語において円唇母音[-o]は唇音声母の後でしか用いられず、使用範囲はごく限られていた。したがって、ウェイドが仮に[-ɤ]と[-ə]の微細な違いを聞き取ったとして、それを表記し分けようと考えた場合、技術的な問題としても[-ɤ]を「o」で表記するのが最

も簡便で自然な解決法であったと言える。

しかし、北京語の音節全表を作る場合には、どの母音とどの母音が同じか、あるいは違うかということについて一つ一つ細かに確認する必要がある。その際、北京語のネイティブとともに確認作業を行うのは当然の手順であろう。『尋津録』および『語言自邇集』本文の成立には応龍田なる人物が重要な役割を果たしたことは知られているが、『語言自邇集』の「音節表」については別の助言者がいた可能性がある。おそらくはその人物（あるいは人物たち）が、「個／客」の韻母と「車／得」の韻母が全く同じであると、主張したのではあるまいか。本文はすでに出来ていて表記の変更を行うことが憚られたため、次善の策として、音節表にのみ「ko, kê」のような形で二種の綴りを併記した、ということなのであろう。

中国語のローマ字表記は16世紀末に始まるが、西欧人は一貫して北京語ではなく南京官話を表記し続けた。19世紀半ばに至って、ウェイドによる北京語の表記が始まった時、音声認識においても、表記法においても、伝統的な南京官話の把握の仕方が影響するのは避けられないことだった。そのような影響の一端が「ko」と「kê」に表れているのである。